

2017.11
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

11号

第39巻
No.340



サフラン *Crocus sativus* L. (アヤメ科 *Iridaceae*)

生薬

サフラン 11月頃から開花が始まるので、咲き始めの花から花柱を摘み取る。細かい目皿のような物の上に広げ、30-35℃のオーブンに入れ、約10時間ほどで乾燥させる。赤色で香りの強いものが良品。

成分

黄色カロチノイド配糖体：crocin、苦味配糖体：picrocrocinとその加水分解物safranal等。

効能

鎮静、鎮痙、婦人用薬として冷え性、血色不良に用いる。料理に着色料として、染料として、また花の観賞用に幅広く用いられている。



生薬 サフラン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



11月頃になると地下の球茎の短い花茎から伸びて花を咲かせます。花は大きく、香りがあり、淡紫色、花糸は白色、雄蕊は3本、葯は黄色、中央部に伸びる花柱は3裂し、鮮紅色を呈します。葉は開花中に地中の球茎より多数叢生し狭線形、灰緑色、主脈は白色を呈し、花後伸長して30–45cmになります。原産地は地中海から小アジア、インドに至る地域とされていますが、はっきりとは分かりません。一説にギリシアのアテネ周辺に自生する *C. cartwrightianus* から選抜されたものと言われています。この種は2倍体で花柱の分枝は葯より短く、交配して種子繁殖が可能であるのに対し、3倍体のサフランは

不稔で球根による栄養繁殖しかできません。この説が正しいこととすると、何らかの原因で3倍体が生まれ、人の手によって繁殖されたものと考えられ、アテネ周辺が原産地と考えられます。BC3650年からBC1100年に栄えたミノア文化の中で、BC1500年頃に起きたサントリーニ島の大噴火で埋もれた遺跡からサフランを摘む女性が描かれたフレスコ画が発掘されていることも一致しています。

すぐ近くのエジプトにおいても『エバース・パピルス』(BC1550)に、また『旧約聖書』の雅歌4章14節にソロモン王(BC971–BC931)の時代の香料として記されています。ギリシアのディオスコリデス(40–90)の『薬物誌』には *krokos* の名で収載され「薬用にはコリュコス産のものが最上であり、新鮮で、色づきもよく、花柱の部分がいくぶん白く、やや長い。花柱のどの部分も壊れにくくあまり油っぽくなく、充実している」と記されています。ここで言う *krokos* はギリシア神話で、ニンフ(妖精)に恋焦がれて死んだ美青年 *krokos* が変身した花と言われ、アラビア語 *kurkum* からギリシア語 *krokos* になり、ラテン語 *crocus* になり現在の属学名になりました。

原産地の一つと言われるアラビアにおいてはササン朝ペルシャ(226–651)時代の物語『アラビアンナイト』の「アリババと40人の盗賊」の中で出てくる宝物庫の最後の部屋にサフランをはじめとしておおくの香料が大切に保管されていたことが記されています。現在イランが最大の生産地であり、アラビア原産地説があるようにサフランをアラビア語で *za'faran* と呼んでいました。ラテン語で *safranum*、イタリア語で *zafferano*、フランス語で *safran*、英語で *saffron* と言います。

中国においては『本草綱目』(1590)に「張華(232–300)の博物誌に〈張騫が紅藍花の種を西域からもたらした〉」とあるが、球根は導入されていなかったのではないかと推測されます。後の『唐書』(945)に「太宗(598–649)の時、伽毘国(インド地方の国名)から鬱金香(『開宝本草(973–974)』に記載)を献じた」と鬱金香の名で詳しい植物の説明がなされていることから、この頃に導入されたと考えられています。

日本における記録は比較的新しく、『用薬須知』(1726)に「近來番舶に将来する所のサフランと云うものあり。本草綱目の番紅花是也」とあり、また江戸中期の『物類品隲』(1763)には「近世紅毛人ドドニヤウスと云う者本草を著す。泊夫藍を図すること甚だ詳なり」、『六物新志』(1786)には現在の植物画と思われるような精密な図が掲載されていますが、いずれも蘭書などからの転載であり実際の植物は渡来していません。実際に渡来したのはそれより後の文久年間(1861–63)とされています。国内での栽培化の試みがなされたのは明治19年(1886)になってからです。この年に初版の日本薬局方に「泊夫蘭」の名で収載されました。(村上守一 記)